

詩学書と語彙類聚

——『王沢不渴鈔』と『平他字類抄』——

村井 宏栄

一、はじめに—詩学書とは—

中古以後、日本では漢詩文作成のためにいわゆる「詩学書」が多く編纂された。本稿で「詩学書」と称しているのは小沢正夫（一九八四）・本間洋一（一九九八）などを承けているのであるが、これは堀川貴司（一九九五・一九九七・二〇〇六）の言う「詩作法書」・「作法書」にもほぼ重なるものと思われる。

日本における詩学書には、様々なものが見られる。すなわち平安初期成立のものとして彼土の詩学書を抄出・再編集する形で成立した空海撰『文鏡秘府論』、平安中期成立の後増補と改編とを繰り返した『作文大体』、漢詩文の対語を掲出しつつ出典故事をも示す菅原為長撰『文鳳抄』、「客」の質問に「予」が答える形で問答が進んでいき、その過程で漢詩文制作に関する知識を授ける良季撰『王沢不渴鈔』（注1）などである。本稿では以下これらのものを「詩学書」と総称する。

詩学書は理論書的なものから秀句選的なもの、さらに用字語

彙集的なものまでその内容・スタイルは多岐に亘る（注2）。漢詩文を制作する際、技巧的な対語や対句、詩文語彙がまとまって示されているのは利便性が高い。詩学書において部分的・全体的にかかわらず語彙類聚がまま見られるのは、こうした書記生活上の要請によるものと考えられる。この結果、詩学書の語彙類聚は必然的に辞書（注3）との連続性が高くなると言える。

本稿ではその一例として『王沢不渴鈔』の語彙類聚と日本語辞書『平他字類抄』とが深い関係を有することを示し、加えてこの両書の関係性の由来について論じていく。

二、『王沢不渴鈔』

『王沢不渴鈔』は良季撰になり、建治年間（一二七五〜一二七八）における成立が推定されている。上下二巻からなる。山崎誠（二〇〇〇）は以下のように内容構成を提示している。

上巻 詩

呂律大体（大きく呂律に二分する）

七言四韻之詩作法

按題詠吟之曲 四季句題詩作法付双貫題

書題（端書）之様

詩懷紙袖書之様

詠吟之次第

勒韻 古調詩 廻文 離合 字訓 越調 江南曲体

絶句 句題絶句 無題 賦物 経題 詠史 贈答 偶吟

連句

下卷 文

詩序

和歌序

願文

諷誦文

〔賦祭文〕

『王沢不渴鈔』は「客」の質問に「予」が答える形で問答が進んでいく。上巻では問答を進めていきながら、時に句例や語彙を類聚していく構成を採る。一例を示す（引用にあたっては割注を□内に記し、改行は／で示す。音合等は省略し、声点は必要な場合のみ示す。以下同じ。）。

題云 待^レ花催^ス勝遊^一〔以盃為韻〕 …〔中略〕 …

客云、已^レ弁事情、次^レ聞^レ作^レ様、

予云、就^レ題目述^レ懷之句、注^レ有^レ要之字、案^レ破^レ題譬^レ喻^レ之情、

出^レ無^レ勞之詞、見^レ之須^一（左訓「ヘシ」）綴^レ一首四韻之詩、
作^レ發句、一字

處 間 下 前 依 有 倚 哉 正 方 何 事 好^ク

有 何 事、時 矣 愛 云 今 則 之 陋 興 感

本 自 元 来 尤 最 此 斯 已 上 常 入 字 也

暖^ク日 催^ス正 春 興 待^レ花 今 有 勝 遊 優 哉

終 日 縁^レ底、斯^ク地 有 由 哉 催

花〔新〕落^一 芬々 郁々 開 落 氣 香 句 / 色 粧 靨

遊〔勝〕佳^一 隨^一 歛^一 命^一 催^一 / 放^一 …〔以下略〕 …

（真福寺本『王沢不渴鈔』一〇ウ三〜一一ウ三）

右では「客」の、句題詩（七言律詩）の作り方について具体的に教えて欲しいという要求に対し、「予」は句題詩における題目（第一聯）・述懷（第四聯）の句には重要な字を配し、破題（第二聯）・譬喻（第三聯）の本意をさらりと詠み込めばよい、とアドバイスする。続いて「作發句字」として「處・間」以下、発句すなわち第一聯を詠むための語句を提示している。

三、『平他字類抄』

『平他字類抄』は漢字・漢語の一字一字について、それが平声であるのか他声（仄声）であるのかを知るための辞書である。撰者未詳であり、大友信一（一九七四）によると正安元（一九九）年頃成立とされている。全三巻であり、上巻、中巻、下

卷(平他同訓字)から構成される。

上巻は漢字・漢語に意義分類を施し、内部を平声と他声とに分類した上で更にそれぞれをイロハ順に配列する。中巻は「辞字」を収録するものであり、用言・副詞等(單字・漢字熟語)をイロハ順に分類し、それぞれを平声と他声とに分類する。下巻は内部構造がやや複雑であるが、大きく分けて平他同訓字・両音字・随読平他字からなる。平他同訓字と両音字の下部にはそれぞれ異なる意義分類が施されている。西崎亨(一九九五)は平他同訓字を次のように解説している。

平他同訓字の部分は、天部・地部・植物・動物・人倫・人躰・人事・飲食・雑物・光彩・方角・員数の各部に意義分類し、続けて詞字・重点・疊字を載せ、次に「両音字」では、地部・動物・人倫・人躰・人事・雑物・詞字の各部をおき、さらに「随読平他字」を一括して収録し、その後、日・月・星・風・雨・雲・霞・霧・露・霜・雪・山・原・水・草・竹・苔・柳・鶯の各項目に分類して重点・疊字を収録する。

一例を示す。左の例は、平他同訓字の冒頭部分である(注4)。

陽(平) [目] (入) 年(平) [歳/載] 風[吹] 辰(平) 時(平) [節]

(京大本『平他字類抄』平他同訓字、天部)

例えば「ヒ」であれば「陽」字は平声であり、「日」は入声すなわち他声であることを示す。辞書の利用者は用いたい平仄

によって用字を選択することが可能である。

四、『王沢不渴鈔』上巻「詞字」と『平他字類抄』平他同訓字の「詞字」

ここでは具体的な記述を検討する。『王沢不渴鈔』上巻、句題詩における第一聯(題目)の詠み方を説いた場面では「客」と「予」の問答の後、以下のように「詞字」について語を類聚して示している(以下傍線・波線は筆者による)。

〔客〕云ク、取ルニ實字ノ風情ヲ一事ハ得テ其ノ意ヲ。虚ノ字ニ取ニ風情ヲ一其ノ意如何。予云、置ニ實ノ字ノ情ヲ一、莊ニ艶之詞ノ字ヲ。入ル、ニ虚ノ字ノ風情ヲ一、以レ之為レ佳。〕
…(略)…

詞字「大字ハ平、小字ハ他」

盈[滿] 堪[酌] 昌[盛] 忿忙[鬧] 芳香[馥]
抽[挺] 収[納] 羞[勸] 窮彊[極] 無[莫罔] 閑[靜]
浮[泛] 差[勸] 窮彊[極] 無[莫罔] 閑[靜]
臻[到至] 隨從[順]
逢[遇會] 援[左訓「アラタム」] 改[開] 發[揚]
[上] 難[叵] 揮[拭] 消[滅] 徐[漸]
頻[荐] 加[亦又復] 惟斯[此是] 從[自] 哉[矣]
其夫[厥] 鋪
敷[布] 超[越] 乖[左訓「ソムク」] 背[栽] 植

種樹 牽 曳 馴 狎 掄 扱 撲

輸 出 齊 均 平 等 懸 掛 呈 彰 顯 連 列

延 展

瑩 琢 昇 登 上 挑 擧 遙 迥 求 覓 馳

聘 令 教 使 遣

將 與 長 永 方 正 應 可 令

(寛永一一年刊本『王沢不渴鈔』上卷一〇ウ〜二ウ)

詞字は用言・副詞等、実質的な名詞以外の語を多く類聚する。

「大字へ平、小字へ他」という注記からもわかるように、同じよみで用いられるが平仄の異なる別字を見出し字直下に記している。例えば第一例「ミツ」であれば、平声で表現したいなら「盈」を、他声なら「満」を用いるということになる。

この「詞字」は、『平他字類抄』の下巻、平他同訓字の中の「詞字」と深い関係にあると思われる。次に『平他字類抄』の「詞字」を挙げ、『王沢不渴鈔』の「詞字」と共通する部分に傍線を、項目の一部分のみが異なるなど共通するものに準じる項目には波線を施した(注5)。

盈 満	堪 耐	昌 盛	抽 挺	念 忙	鬧
芳香 馥	収 納	鏡			
浮 泛	羞 勸	窮 疆 極	無 莫 罔	臻	
到 至	悛 改	随 從 順			
逢 遇 會	開 發	揚 上	閑 靜	難 巨	

揮 拭 消 滅 徐 漸

頰 荐 加 亦 又 復 惟 斯 此 是 從 自

其 夫 厥 鋪 敷

哉 矣 栽 植 樹 超 越 乖 背 牽

曳 引 馴 狎 掄 扱 撲 齊 均 平

輸 出 延 展 懸 掛 呈 彰 顯 連 列

昇 登 上 瑩 琢

令 教 使 投 擲 擲 搖 動 遙 迥 求 覓 趁 馳 聘

挑 擧 搖 動 遙 迥 求 覓 趁 馳 聘

將 兼 與 長 永 方 正 驚 駁 休 息

侵 冒 斟 酌

占 卜 應 可 埋 塞 廢 纒 (左訓「サイ」)

僅

(京大本『平他字類抄』平他同訓字「詞字」) 一見して明らかかなように、両者には緊密な関係が存在する。『王沢不渴鈔』から見た場合、五二の掲出グループのうち四一のグループ(注6)が完全に共通し、残る一グループのすべてがこれに準じる(注7)。

ただし『王沢不渴鈔』の「詞字」部分は諸本に異同が見られる。すなわち真福寺本では途中から本文が欠落しており、真如藏本では全く異なった内容となっている。次に示す。

詞字「大字平、小字他」

盈〔滿〕 堪〔耐〕 昌〔盛〕 念忙〔鬧〕 芳香〔馥〕
抽〔挺〕 収〔納〕 浮〔泛〕 羞〔勸〕／窮彊〔極〕 無
〔莫〕罔 閑〔靜〕 臻〔到／至〕 隨從〔順〕 逢〔遇〕
會 援〔改〕 開〔発〕 揚〔上〕 (以後欠落あり)
(真福寺本『王沢不渴鈔』一三ウ六―一三ウ八)

詞ノ字

処に帶曉朝時如疑含程中
裏下前後底暮白傍間邊辰
猶尚勸弁翫嘲咲迎送景辞
揺動迷望先已既孤属思待
遍方正偏誰當情期幾急念
毎成好發伴類唯皆共追開
観問此是過可應斯余何速
哉矣混^混高^高因^因 (左訓「ヨツテ」) 随嗜暫侵類只

(真如藏本『王沢不渴鈔』一ニウ五―一三才四)

山崎誠(二〇〇〇)は、寛永二一年刊本と真福寺本はほぼ同文であったと推定しており、真如藏本の記述の異なりについては「少なくとも「同訓異字」を列挙したものではない。…(略) …今この理由について明確な説明をなさない。」としている。

五、詩学書における語彙類聚

前節では『王沢不渴鈔』の「詞字」と『平他字類抄』平他同訓字の「詞字」が深い関係を有することを示した。『平他字類抄』平他同訓字の一部が『文鳳抄』巻十から直接の影響を受けていることは川瀬一馬(一九五五)・大友信一(一九七四b)によって既に指摘されている。しかし本稿で取り上げた『王沢不渴鈔』の「詞字」との関係については管見に及ぶ限り未だ指摘は見出されず、両書の成立を考える上で今後考えていかなければならない問題である。また本稿の指摘は『平他字類抄』が『文鳳抄』に加えて『王沢不渴鈔』にも出典において関連するとう、二つの詩学書との距離の近さをも示していることになる。詩学書が語彙を類聚する際、その部分を取り出して一書とするならば、それは辞書成立の契機ともなりうるのである。

筆者は前節に挙げた『王沢不渴鈔』の語彙類聚部分が「詞字」を標榜していることに注意したい。『王沢不渴鈔』の記述は、句題詩の第一聯(題目)についての詠作ルールを説いている。平安中期に定着した句題詩(注8)について、句題は漢字五字によって構成され、うち実字(具体的事物を詠み込んだ字)と虚字(用言・助辞あるいは抽象概念を表す字)とを含むことになっている。第一聯では実字を詠み込み、その後後に「艶之詞字」、すなわち縁語の詞字を配置するという(堀川貴司 一九九五)。そこには「虚ノ字ノ風情」を入れたものが良いとされる。句題詩詠作によって、句題の実字・虚字と並んで「詞字」は重要概念であり、これを項目化した理由も了解される。

ところで日本古辞書における「詞字」とは、意義分類体辞書の伝統的分類名目でもある。例えば『色葉字類抄』の原形本とも目されている鎌倉時代古鈔本(注9)や鎌倉時代成立の百科事典的語源辞書『塵袋』などでは詞字門(注10)を項目化する。これらには用言や副詞類・抽象概念語、すなわち「非ものの名」の語が類聚されている。

類書的なものの名の類聚から離れ、名詞以外を辞書意義分類に採り入れようとするとき、そこには書記生活上の要求が顕在化する。文は典型的な「ものの名」のみから構成されるわけではないからである。その意味において「詞字」「疊字」(注11)「重点」等、意義分類体辞書における「非ものの名」に注目することは、背後にどのような書記実態が存在しうるのかを考える上で重要な手掛かりとなりうる。

例えば三宅ちぐさ(一九八二)はイロハ字類抄系諸本の収録語状況により、詞字門が後の人事門・辞字門・疊字門へと分化する前段階のものであることを推測しており、よって分化のものさらに「X々」のような同字反復の語(以下「重点」)を重点門として項目化していったことが想像される。村井宏栄(二〇〇二)ではこの分化後の『色葉字類抄』重点門を取り上げ、諸本成立過程においてなぜこれが項目化されたのかを論じ、重点門の項目化は漢詩文制作への対応が意図されたためと結論付けた。

詩学書において重点を対句技巧として論じる、あるいは語句を類聚したものは複数見られる(注12)。重点は漢詩文制作に

おける有効な対句技法の一つとされ、実際に類用されていたからである(注13)。

春花面々 關入酣暢之筵
晚鶯声々 予參講誦之座

江

(『和漢朗詠集』上卷「花付落花」、大江朝綱)
詩学書における例として群書類従本『作文大体』では重点を用いた対句を「文章有二十二对」の中の「疊对」とし、語彙類聚とともに句例を示している。左に示す。

文章有二十二对 「詩賦雜筆等同用之。」

一色对。二物对。三同对。四异对。五数对。六疊对。七連

綿对。八正对。九音对。十傍对。十一義对。十二双对。

…(略)…

第六疊对

悠々。眇々。迢々。济々。斑々。瑟々。緘々。焰々。皓々。

時々。剋々。年々。歳々。門々。家々。往々。行々。散々。

段々。穆々。楚々。溶々。湛々。巍々。蕩々。泛々。沉々。

綿々。連々。耿々。明々。孫々。愬々。喧々。杳々。

所謂。泛々花泛酒。飄々風唳琴。

句云。池色溶々藍染水。花光焰々火燒香。

(群書類従本『作文大体』四九三頁)

また、重点の類聚は鎌倉初期成立の詩学書『文鳳抄』にも見られる。『文鳳抄』は対語を各部門に意義分類して掲出する形式をとる。本書は一項目について熟語・例句を挙げてその典故・

故事を示す部分と、語彙を羅列する部分からなる。次に示すのは「雲」の項目のうち後者の部分である。

雲〔陰〕朝—暮—寒—曙—山—嶺—洞—澗—溪
—白—青—行—片—暗—浮—低—孤—
膚色 蓋 聳 掩 籠 靄 影 氣 横 鎖 凝 起
光 浮 破 散 乱 収 帰 皆以二字有「雲意」
片々 亭々 油々 靄々 凄々
氛氳 飛揚 聚散 靄靄 慘惻 靄靄

（『文鳳抄』卷二、天象部）

右の例では「雲」字直下の割注に「陰—（陰雲）・朝—（朝雲）」等、後部構成要素に「雲」を用いた語の例を挙げ、次に一字で雲の意味を表す字を類聚する。続いて雲の様子を表す二字形容語を集めているが、この中でまず重点を示し、その後で重点以外の語を類聚することに注意したい。重点以外の語においては双声・疊韻（注14）の語が多いと指摘できる。右の例では「氛氳・慘惻・靄靄」が疊韻、「靄靄」が双声であり、やはりここでも対句技法への対応が想定される。加えて「片々」から「靄靄」までの語は、「凄々・聚散・靄靄」以外すべて『平他字類抄』平他同訓字の「随読平他字」の後の「雲」の項目の語に現れ、出現順もほぼ一致する。

雲

片々 亭々 油々 靄々
氛氳 飛揚 慘惻〔冬〕 靄靄

（京大本『平他字類抄』平他同訓字「雲」）

『平他字類抄』平他同訓字の中には「随読平他字」の部分の後に「日・月・星・風・雨・雲・霞・霧・露・霜・雪・山・原・水・草・竹・苔・柳・鷺」の項目が存在し（西崎亨一九九五による）、それぞれにおいて重点・疊字（二字熟語）を類聚する。ここに挙げられた語彙は京大本を底本とした木村晟（一九九二）の校訂本文から見ると、一二〇語中一一二語が『文鳳抄』の巻一〜九の各項目における語彙類聚部分に見られる。漢字は一致するが「々」のみ記されていない例を含めると一一六語（九六・七％）合致することとなり、確実に影響関係があると言える。そして西崎亨（一九九五）の項目配列によるとすると、『文鳳抄』の意義分類配列自体がこの項目の配列順に等しい。つまり『平他字類抄』平他同訓字は『文鳳抄』の巻十からのみ影響を受けたわけではなく、本体とも言うべき巻九までの部分からも出典において関係すると言えるのである。

六、対句技法定義の根拠

最後にもう一点、対句技法の定義において詩学書では辞書分類名目を多用する点も指摘したい。次の記述は『王沢不渴鈔』上巻冒頭、対句技法の定義を述べる部分である。一字発句に始まり九字句まで、漢字文字数によって句の名称を分類している。三字・四字・五〜九字からなる句がそれぞれ壯句・緊句・長句

であるという知識を盛り込みつつ、各句に一種類ずつの対句の実例と解説を加えている。やや長いが、以下引用する。

予「一字發句 筆体之初置此字類也」右 夫 此類也

于時「二字發句／原夫 觀夫 窃以 此字類也」

孟秋天「平」 餘暇日「他」

「壯句三字ニ有レ對。存ス字對」一。天ト与日同ク天象ノ故ニ

或云正對ト。又云切對ト。或人云の名對ト。

或人云、字對者義別ニシテ而字對ス云。

所謂 桂棹 荷レ戈、仏ノ神通 僧祇劫等也。」

早送テ朱明「平」 已ニ迎テ素律「他」

「緊句四字ニ有レ對。存ス色對」一。朱与素同光彩ノ故ニ、

或人云、以此對「可屬ス正對」一。云々。」

憐シテ三商之景「他」 斷ツ万感之腸「平」

「長句五字ニ有レ對。存員對」一。三与万一同員數ノ故ニ、

自リ五字ニ至マテ九字ニ 皆同ク名長句ト。／

抑用ル員對「一之時ハ、數ノ下ノ字ニ強ニ不求對」一。云々。

胡角一声 漢宮万里 聲与里強ニ非スレ對ニ。是其証也。」

方今「傍字 但此字ハ通ス発句ニ。中間隨便宜ニ置此類」一。

就中 因茲 然則 此其類也。此三ハ但傍字也。」

浮鐘和ノ霜ニ而動キ「他」 遊客乗テ月ニ來ル「平」

「同句 六字ニ有レ對。存片對」一。鐘与客

又云側對ト。本云字側對。此對ハ殊ニ可賞翫ス。漢朝于公義、秘ス箱ノ底ニ。云々。」

望メハ天末「一」夜ノ雲悉ク收リ 見レハ地表「一」秋ノ影方ニ霽シタリ

「同句七字ニ有レ對。存異對」一。天与地、天地異故

此對若以天地「取方角」者可屬正對ニ。今ハ暫ク以天地相

違之義「一、屬異對」一。

爰客問云、項日「通発句 傍字」

欲睇夕臺清明之月「キ」 擬嘲ラムト玉殿颯然之風「セ」

「同句八字ニ有レ對。存音對」一。夕与玉音同カ故ニ、夕

ハ時節、玉ハ雜物雖非ト對ニ、夕ノ音通レ石ニ。仍以對レ之。

或云聲對ト。」

仍「傍字」

染メ紫毫「於東西（右傍「花陽觀」）府之霜」

添メ墨点「於方圓（右傍「散騎者」）石之露」

「同句九字有レ對。存義對」一。紫与墨、墨ハ其ノ色黒カ

故ニ、以光彩之義」

對紫ノ字「一。但此對事舊ク不用。近來有其沙汰」。就中今

所對紫墨ノ兩字、似側對ニ。不可乱之。以義對レ之。」

已上五六七八九、五種ノ長句畢云々…（以下略）…

（真福寺本『王沢不渴鈔』二二オ〜三オ）

例えば四字句「早送朱明 已迎素律」を取り上げると、漢字四字句からなるのは緊句であり、ここに用いられた対句技法は色対であると説かれる。その根拠は「朱」、すなわち「あか」及び「素」すなわち「しろ」がともに「光彩」であるからという。同じく漢字八字からなる「欲睇夕臺清明之月 擬嘲玉殿颯

然之風」は長句であつて、用いられている対句技法は音対である。「夕」は「石」に字音が通じるので「夕」と「玉」が音対になる、と説明される。ただしその前提として「夕」と「玉」がそれぞれ「時節」と「雑物」であるから本来は対句にはならない、としていることに注目したい。

右の記述から帰納される詩作ルールとは、対句認定のためには同じグループに属する語同士の組み合わせでなければならぬといふものである。『王沢不渴鈔』では対句技法判定の根拠としてそのグループ名、すなわち辞書分類名目が用いられている。かかる記述が理論化される前提として語への分類意識が存在し、それが辞書分類名目に合致するのである。ここにも漢詩文制作と辞書意義分類との関係の近さが表れていると言える。

七、まとめ

詩学書は漢詩文制作の作法を論述する、言わば理論書的なものから、そこに部分的にせよ語彙類聚が入り込んだもの、秀句選的なものまで多様なタイプのもものが認められる。理論書形式のものとしては『文鏡秘府論』、そこに語彙類聚が入り込んだものとして『王沢不渴鈔』や『作文大体』を位置付けることができる。一方でそうした詩文語彙の類聚が専一化して一書を成したとき、そこに『文鳳抄』などの書が生まれることとなる。堀川貴司（一九九五）は句題詩に焦点を当て、詩学書の性質

の相違を次のように言う。

こうして、『作文大体』に始まった句題詩詠作のマニユエル化は、『真俗擲金記』に見られるような各博士家での伝承を経て、『王沢不渴鈔』に至つて体系化・固定化が窺まり、その過程で『文鳳抄』などの工具書を産んだ、ということになるうか。

本稿では『王沢不渴鈔』と『平他字類抄』とを取り上げ、両者が深い関係を有することを指摘し、合わせて詩学書における語彙類聚と意義分類体辞書との相関の問題を考察した。「抑諸家争談病犯」、諸儒各造格律」、載多在車」（『王沢不渴鈔』序文）とも言われる詩学書編纂において、ある特定の語を類聚して示すという書記生活上の需要が存在したとき、それは辞書が誕生する潜在性を内包していたと言えるのではないだろうか。

【注】

- 1 本間洋一（一九九三・二〇〇二）は「渴、は渴に改めるべきもの」とし、書名を『王沢不渴鈔』とする。
- 2 したがつてそれぞれの詩学書についてもその本質をどう見るかは研究史上においても安定していないと言える。例えば『文鳳抄』については「作詩作文のための参考書」（『日本漢文学大事典』）、「類書（漢故事や語彙を集めた作文参考書）」（『日本古典文学大事典』）、本間洋一執筆）、「一面に教科書的な性質を帯びてみると共に、故事を類聚した辞書とも見られ」（川瀬一馬『古辞書の研究』）などとされている。
- 3 いわゆる辞書は分類方法、構造などにより字書・辞書・韻書などに分

- 類できるが、本稿では以下これらを総称して「辞書」とする。
- 4 京大本「陽」の傍訓「シ」。宮内庁書陵部蔵石橋真国識語本によって改める。
 - 5 傍訓・声点及び配列順序は考慮に入れていないが、配列順序についてはおおよそ等しいことが確認できる。
 - 6 比較の基準は掲出グループ単位とする。掲出グループとは、平声見出し字と直下の漢字とを合わせたものとする。
 - 7 逆に『平他字類抄』から見た場合、六一グループのうち四一グループが共通、一一グループがこれに準じることになる。
 - 8 句題詩については近年、本間洋一(二〇〇二)・佐藤道生(二〇〇七)等によって大きく研究が進められつつある。
 - 9 川瀬一馬氏蔵鎌倉時代古鈔本、子篇地儀門くヲ篇雑物門までを現存する写本。天象・地儀・人倫・人体・動物・植物・雑物・飲食・員数・光彩・方角・詞字の一二門を有していたであろうことが推測されている(三宅ちくさ 一九八二)。
 - 10 以下「詞字門」のように、辞書意義分類の単位を「門」とする。
 - 11 辞書意義分類における「疊字」の展開については村井宏栄(二〇〇七)で述べた。なお、『文鳳抄』に後行するとも言われる秀句選的な詩学書『擲金抄』においても中巻の意義分類目録には「疊字」が見え、「疊字」の部立てを持っていたと考えられる。ただし残念ながら『擲金抄』は写本であり、当該部分は本文が欠落している。
 - 12 『文鏡秘府論』「二十九種対」の賦体対、『作文大体』「文章有十二対」の「疊対」、『玉沢不渴鈔』の「重字韻」等。
 - 13 大曾根章介(一九七四)は平安時代、駢儷文の対句に疊対(重点の語による対句)が多いことを挙げ、その一因は「章句が朗詠によって伝播浸透して行った」ことから「聴覚に訴える字音の対句が大きな位置を占

め」ていたためと述べる。

- 14 双声とは、漢字二字熟語において各字の声母が同じである語を言い、疊韻とは、漢字二字熟語において各字の韻母が同じである語をいう。双声・疊韻の語による対句は、『文鏡秘府論』賦体対・『玉沢不渴鈔』「疊韻」などに指摘がある。

【引用・参考文献】

- 大曾根章介 一九七四 平安時代に於ける四六駢儷文、『中央大学文学部紀要』七一
- 小沢正夫 一九八四 『日本古典文学大辞典』「作文大体」の項、岩波書店
- 大友信一 一九七四 a 「平他字類抄」の諸本について、『岡山大学教育学部研究集録』三八
- 大友信一 一九七四 b 「平他字類抄」の成立―「文鳳抄」との連関を中心に―、『岡山大学教育学部研究集録』四〇
- 川瀬一馬 一九五五 『古辞書の研究』雄松堂出版
- 佐藤道生 二〇〇七 句題詩概説、『句題詩研究』慶應義塾大学出版会
- 西崎亨 一九九五 西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』主要辞書各説(二十一、平他字類抄)の項、世界思想社
- 堀川貴司 一九九五 詩のかたち・詩のころ―『本朝無題詩』の背景―、『国語と国文学』七二五、後に堀川貴司(二〇〇六)に収録
- 堀川貴司 一九九七 『真俗擲金記』小考、『愛知県立大学説林』四五、

後に堀川貴司(二〇〇六)に収録

言語研究』創刊号

堀川貴司 二〇〇六 『詩のかたち・詩のころ—中世日本漢文学研究—』若草書房

山崎誠 二〇〇〇 『漢文学資料集』解題、真福寺善本叢刊第一期

二卷(文筆部二)、臨川書店

本間洋一 一九八七 『擲金抄』の素材について—注文・語彙をめぐって—、『中央大学国文』三〇、後に本間洋一(二〇〇二)に収録

【使用テキスト】
王沢不渴鈔 真福寺本・真如蔵本：『漢文学資料集』真福寺善本叢刊第一期第一二卷(文筆部二)、臨川書店、二〇〇〇

寛永一一年刊本

本間洋一 一九八八 『文鳳抄』編纂素材についての一考察、『国語と国文学』六五—七、後に本間洋一(二〇〇二)に収録

作文大体 新校群書類従卷一三七

平他字類抄 京大本：『京大本平他字類抄』臨川書店、一九七三

本間洋一 一九九三 平安朝句題詩管窺—七律詩を中心とする覚書として—、『講座平安文学論究』第九輯、風間書房、後に本間洋一(二〇〇二)に収録

宮内庁書陵部蔵石橋真国識語本：『平他字類抄・文鳳抄卷十秘抄』古辞書研究資料叢刊第二卷、大空社、一九九五

本間洋一 一九九八 『日本古典文学大辞典』「作文大体」の項、明治書院

文鳳抄 本間洋一校注『文鳳抄』歌論歌学集成別卷一、三弥井書店、二〇〇一

本間洋一 二〇〇一 文鳳抄(解題)、本間洋一校注『文鳳抄』歌論歌学集成別卷二、三弥井書店

和漢朗詠集 大曾根章介・堀内秀晃校注『和漢朗詠集』新潮日本古典集成、新潮社、一九八三

本間洋一 二〇〇二 『王朝漢文学表現論考』和泉書院

三宅ちぐさ 一九八二 いろは字類抄における意義分類の変遷とゆれ、『岡大国文論稿』一〇

【付記】本稿は二〇〇三年度三重大学日本語学文学会大会(於三重大学人文学部、二〇〇三年六月二日)において「詩学書と中世日本語辞書の意義分類」と題して行った口頭発表内容の一部に基づくものである。席上、

村井宏栄 二〇〇二 『色葉字類抄』重点門の項目化、田島毓堂・釘真亨編『名古屋大学日本語学研究室 過去・現在・未来』

多くの方より貴重な御意見、御教示を賜った。記して深謝申し上げる。

未来』

村井宏栄 二〇〇七 『「晝字」の周辺』Nagoya Linguistics(名古屋

【むらゝい ひろえ 本学非常勤講師】